

寺前信次著

区隊長の想い出

区隊長の思い出 目次

まえがき	・ ・ ・ ・ 1
戦地に於ける教育と学校教育	・ ・ ・ ・ 2
戦地からの赴任	・ ・ ・ ・ 2
実戦を知らない指導教育	・ ・ ・ ・ 3
60期生を迎える準備と仮入学	・ ・ ・ ・ 4
個人の調査資料と顔写真の暗記、入学辞退勧告	・ ・ ・ 4
父兄との面接	・ ・ ・ ・ 4
戦闘は有形無形の戦闘要素を利用することである	・ ・ ・ ・ 5
経験の重要性	・ ・ ・ ・ 5
地形の利用教育	・ ・ ・ ・ 5
教育視察	・ ・ ・ ・ 6
臨機応変の教育	・ ・ ・ ・ 6
諸葛孔明はなぜ、泣いて馬謖を斬ったか	・ ・ ・ ・ 8
渋谷区隊長の戦死を偲ぶ（㊹～十）	・ ・ ・ ・ 8
豊島園と村山貯水池サイクリング	・ ・ ・ ・ 9
豊島園への行軍	・ ・ ・ ・ 9
村山貯水池と所沢へのサイクリング	・ ・ ・ 10
大東亜戦争後半期の概要（陸士60期生入学前後の戦況）	1 1
第四中隊第九区隊物故者氏名・命日表	・ ・ ・ 1 4
おわりに	・ ・ ・ 1 5

まえがき

平成十八年二月、今年の幹事の林光春君から本年の寺前会は、慶泉寺住職「渡津弘道」君が寺の境内に大仏を建立した機会に（羅漢像の一体の背面に「寺前会永代供養塔・・・四の九士官候補生有志一同」と銘記）、物故者会員の霊を弔うと同時に永代供養を行いたい旨の連絡を受けた。誠に時宜を得たものと感涙して参加を快諾した。又、私が以前に訪れたことのある「奥三河の古戦場（長篠の役）と鳳来寺の旅」の小刷子を綴り、参加者各位に郵送した。

しかし五月三十一日～六月一日の一泊二日の旅は渡津弘道君の緊急入院のため延期となり、八月に入って寺前会の再開（期日は十月十日～十一日）の通知を受領した。万難を排して参加に意欲を燃やして老体に鞭打ち、気力を奮い起こして体力の増強に努めたが効果はあがらず、千載一隅の好機に逸す無念は慙愧に耐えないと思いつつ、九月五日に不参加の返信を郵送した。

懊悩苦悶中の九月七日のことであった。陸士第六十期生会本部より終戦六十周年記念「戦没者追悼記」が郵送されてきた。その追悼記には戦没されて靖国神社に合祀されている牧野四郎校長閣下（比島・第16師団長・レイテ島で戦死）以下中隊長・区隊長二十名と、六十期生二十四名（予科）の追悼文が掲載されていた。戦死された牧野校長から各中・区隊長の在りし日の御勇姿は歴然と私の脳裡にあり、哀悼の意を表して読破した次第である。

「編集後記」として「在校中と終戦直後死亡の同期生物故者氏名」（戦没者追悼記152頁）の筆頭に『4の9 豊嶋 毅。 20、2、13死亡。 死因 病氣。情報提供者 秋山照雄』とあり、154頁にも6行の記事が掲載されていた。

手嶋 毅君に就いては昭和19年の暑中休暇の際、区隊長の私と御母堂様の二人が陸軍軍医学校に呼ばれ、担当医の軍医少佐の方から詳細にわたる病状の説明があった。分厚い医学書を開き、この病名は「リンパ肉腫」と云う「癌」で、発病後約6ヶ月で死亡すると宣言された。

そこで中隊長と連絡をとって手嶋君を自宅療養者とし、御母堂様と同道して自宅を訪れて彼に会い、病の性質を伏せて懇談し激励したことが昨日のような気がする。御母堂様は息子が陸士を卒業していれば、飛行機で敵陣に急降下爆撃させて自爆させてやりたかったと申し立てた。流石に手嶋房太郎第2軍司令官（22期・中將）閣下の妻らしき発言だと感服した。

奇しくも私が支那戦線で奮戦敢闘した第35師団は昭和19年春に南方戦線に転進し、手嶋第2軍隷下（濠北派遣軍）に入り、我が聯隊主力はニューギニア北方の「ビアク島」「ヌンホル島」で玉砕したのであった。我が生き残りの部下は戦後も手嶋閣下と面接していたと聞く。

この陸士第六十期生会から「戦没者追悼記」の送付を受けてから、私は「区隊長」として何か書き残して寺前会の区隊の人に渡したいと考えた。しか適当な題材が浮かばず苦慮していたとき、第一線の将校と学校附の将校との念頭に大きな差があることに気付き、これを書き残して「区隊長の想い出」としたいと考えた。しかし寺前会が開催される10月10日までの日数を考えると、通院・灸等を除くと半ヶ月足らずである。浅学非才な私には責任と負担などが更に加わって過重な仕事ではあるが、非難されるべき点は御寛恕を御願いして拙文を書くことにした。これはあつかましい恥知らずであり、厚顔無恥と言わなければならない。

私自身を自己判断すると第一線指揮官が適任であり、第一線の参謀の適格者ではないかと思っている。それは責任感の問題とも関連し、敵弾下を平然と図太く馳駆する性格が然らしめるものである。自己判断で教育者としては人格的に適任者かどうかは解からない。

人間は同時に二つの自己を持っていると思われる。それは賢と愚、意志と無意志であろう。

戦地に於ける教育と学校教育

戦地からの赴任

人格的統率を弾丸雨飛の死生の極限に学び、枯野の燃えさかるが如く熾烈にして充実していた北支那の黄河戦線を去り、陸軍士官学校（予科）生徒隊附を拝命したのは昭和18年10月だったと記憶している。それまで歩兵・砲兵・工兵・その他の配属部隊を含めて約400名を、運用の妙は一心に存すのだと驚天動地の間に戦闘を指揮し、人間的魅力を以って衆望を集め、諸兵の師表たらんと奮戦力投してきた。

「興国在人、倒国在人」（国を興すも人に在り、国を倒すも人に在り）と阿鼻叫喚の戦闘を共にした部下戦友との離別は、万感胸に迫る思いがあつて去り難く、これが第一線の将兵との別れの心境であつた。

血脛（ちなまぐさ）い河南戦線から京漢線に乘車して北京に一泊、山海関から奉天（瀋陽）を経由して朝鮮半島を縦断し、関釜連絡船で下関に上陸した。それから新幹線のない時代の山陽線～東海道線で上京したのであつた。このコースは往復三回目だったから歴然として記憶にあり、全行程の所要時間は約60時間だったと記憶している。

振武台の陸士予科を訪れて先ず生徒隊副官に申し、柿原生徒隊長・幹事閣下・校長閣下の順に申告した後、生徒隊付中佐三人に申告した。その際、附中佐から陸大受験は一年間は遠慮して教育に専念してくれるようにと宣言された。

配属となった第4中隊の天野中隊長に申し、続いて区隊長室に於いて先輩同輩の区隊長に申告・挨拶して、区隊長職に就いたのである。最も遠い最前線からの最も遅い赴任であつた。

在校生は59期のみで、59期の区隊長は51期、52期、54期の各一名で、60期の区隊長はすべて新任であり、極限の修羅場を生き抜いてきたのは私一人であつた。我々の予科時代の区隊長は3年以上の経験者であつたと思うと、それ以来、戦争の戦線は拡大して兵力は増強され、それに要する将校の数も増大しなければならず、区隊長の増員もやむをえないのであつた。（区隊長は生徒隊付として任命される）

区隊長として第4中隊に配属された第一印象は緊張の度合いの違いであつた。負傷すること2回（後日のビルマ戦線で1回）に及ぶ3年間の戦闘経験で身に付いた生死の緊張感から開放され、これで好いのかと自問した。朝の出勤時間までに出勤し、勤務時間がくれば家に帰る。全く考えられない生活には戦闘ボケだろうか中々馴染めない。

59期担当の先輩区隊長は来年の陸大受験に懸命で、勤務のない午前中は作戦要務令と首っ引きの状態であつた。私の経験では戦場生活だったため、そのような体験はなく、戦闘が最高の教育者だつたと思っている。作戦要務令の文章を暗記するのが受験の最高の手段ならば、戦地生活者は全員が不合格に決まっている。戦いは病気と同様で同じ病でも同じ症状は絶対にならないのである。

陸大の学科試験は五日間もあり、四日間は図上戦術問題で一問題の解答時間は二時間、合計八問題であつた。最後の一日はその他の軍事学（兵器学、築城学、射撃学、航空学等）だつたから、合格不合格の問題は戦術問題であつた。先輩区隊長に次のように申し上げた記憶がある。

戦いの哲学は奇抜な戦術ではなく、あくまでも正攻法でなければならず、彼我の力関係を考慮して敵の弱点を衝き、味方が絶対的に有利に戦えるという確信した時のみ奇襲を考える。そして自分の案の「必要性」と「可能性」を徹底的に追求することが成功の鍵だと。

実戦を知らない指導教育

赴任してから翌年3月の60期生が入校するまでの長期間、新任区隊長には確定した任務がなく、59期生の教育を補助する他、生徒隊附中佐の指導で陣地攻撃等の演習が実施された。

某日、学校の平坦な練兵場で各中隊附下士官を使用して陣地攻撃の演習が実施された。その状況は、陣地攻撃中の第一線歩兵が敵砲兵の集中砲火を浴びて被害甚大という想定である。

その時の指揮官(分隊長か小隊長か中隊長かの記憶にない)の処置如何と云う問題であった。生徒隊附中佐は参加していた我々新任の60期生区隊長に質問を浴びせ、各区隊長は質問に答えていた。順番が私に回り解答を求められたから、咄嗟に「速やかに壕を掘り被害を最小限に食い止める」と返答した。すると中佐は全く同感だと褒めたのである。しかし私の心の奥では、実戦を知らない人たちがばかりだと嘲笑していた。

当時の軍隊は退くとか退却、逃避という言葉は厳禁であったから、私は壕を掘ると答えたが、真意は速やかに其の場から退避することであった。实际的に背囊から円匙(えんぴ、小型スコップ)を出して土を掘る間に、どれだけ多くの犠牲者を出すか計り知れないのである。

私の返答に賛辞をおくる者は、実際の戦場の経験がない者の言であり、阿鼻叫喚の砲撃地獄の中で壕を掘ることは精神的にも肉体的にも不可能なことである。実戦では人間を含めた動物は動物的感覺が働き、自然に危険な場所から遠ざかる習性があるものだ。

砲兵の集中砲撃はどの国の砲兵でも三分間が限度である。砲兵一門の一分間の発射速度は大体に於いて7発～8発で、三分間で21発～24発である。1ケ中隊が4門とすれば三分間で84発～96発、その炸裂の爆音だけでも生きた心地はしない。そして、これ以上発射すると砲身が焼けて湾曲してしまうから、その三分間を如何に身を処すかが問題である。

だから集中砲火を浴びた歩兵は、三分間の時間だけは姿勢を低くして我慢するしか方法がない。或いは砲兵の集中射撃は転射して移動する人が多いから、身動きが出来ない1～2分間はジット我慢した後、安全な場所に移動するのが実際の戦場の実相である。

私は区隊長に転任するまで黄河南岸の橋頭堡陣地で、黄河を背にした背水の陣で歩・砲・工等を指揮する諸兵指揮官であった。その体験によると、歩兵隊は敵歩兵の機関銃や小銃の猛射を浴びると、反撃精神が旺盛となって猛烈に撃ち返し、敵を鎮圧させる習性があった。しかし敵の砲撃には手も足も出ず、極めて弱気になって沈黙するのであった。

一方の砲兵隊は敵砲兵の集中射撃を浴びても少しもひるまず、反対に砲撃を受けながら犠牲をかえりみず、反射的に砲撃を継続して敵砲兵に猛反撃射撃を浴びせていた。しかし敵歩兵の小銃や機関銃の射撃を受けると極端に弱く、身を伏せて沈黙してしまっただ。戦場の心理は誠に不思議なもので、諸兵の習性を上手に使い分けるのが諸兵指揮官の手腕である。

生徒隊附中佐指導の陣地攻撃演習は、歩兵が砲撃を喰った想定であった。この想定は陸士の予科・本科の教育では荷が重く過ぎて不適當だと私は思っている。陣地攻撃の基本を教育するのであれば、砲撃を入れるべきではない。砲撃を浴びての攻撃は応用動作であり、実際の戦場での実地教育でなければ教育は困難だと思っている。

若し国内で教育するとすれば、実施教育の専門である歩兵学校でなければならない。米軍の海兵隊の訓練を画像で見ると矢張り専門的だと感じさせられ、大いに参考になると思う。

最難関の試験を突破して入学してきた陸士予科生は士官としての基礎教育の教練と普通学が主であり、本科は軍事学、特に戦術教育に重点を置かねばならない。教練ばかりを教育するのであれば予備士官学校である。以上は新任区隊長の教育演習を体験した私の感想であった。

60期生を迎える準備と仮入学

個人の調査資料と顔写真の暗記、入学辞退勧告

昭和19年に入ると新入生・陸士第六十期生の各人の詳細な資料が、中隊長から区隊長に渡された。どのようにして各中隊に配属され、又、区隊に分けられたかは全く解からない。

その資料と云うのは、入学試験の各科目及び総合成績表、戸籍謄本、各出身学校長の意見書、各市町村長の意見書等で、何れも良いことばかりが記載されていた。配属将校の意見書は前記の意見書とは少々異なり、欠点等も記載されていた。その他には軍の将校生徒を養成する学校に相応しく憲兵隊の調査表もあり、本人は勿論のこと家族の人物評価、素行なども詳細に記載され、辛辣なことまで記述されていた。

我々区隊長は、新入生の入学試験の願書に添付された写真を見て顔写真を暗記しながら、各資料までも反復に反復を重ねて暗記した。それが二ヶ月ばかりの間の仕事だったから、現在でも薄々とは云え身上調査も記憶している。絶対秘密は勿論厳守している。

いよいよ2月下旬の仮入学の時期を迎えた。各区隊は一日に何名を迎えたかは記憶にないが、10名以内だったのではなかろうか。新入生は学校の正門から入り、大講堂前の大広場に誘導されて来て、各中隊、各区隊の表示の前に不安な顔付きをして、躊躇しながら整列し始めた。

アイウエオ順で並び始めた其の時、初めて顔を合わす新入生に向かって区隊長の私は、「秋山照雄」「穴尾義夫」「安藤哲郎」「石田英雄」等と顔を睨んで大声で呼びつけた。生まれて初めて見合す初対面で、自分の氏名を呼ばれた新入生は、狐に化かされたよう顔して、吃驚仰天して怒気を抜かれた格好だった。初年兵として入隊する新兵の場合も概略は同じだが、顔写真まで添付されるのは流石に陸士だけであった。

入校式が行われる前のことである。幼年校出身以外の新入生を各区隊長は一人ずつ個室に呼び寄せて、憎たらしい質問を浴びせて入校を諦めさせるように誘導尋問を行った。漸く難関を突破して憧れの陸士に足を踏み込むや否や、入校辞退を迫るのだから精神に錯乱を起こすのも無理はない。どれだけ侮辱されるような嫌な質問にも耐え、入校を切望する者だけが入学を許されるのであった。これは伝統のようで私も入学前にも実施された経験がある。

昭和19年の戦争末期とは云え、世は軍国主義の真っ最中である。入校を辞退した者が出たとは聞いていない。若し入校を辞退した場合には、全国の国立・高等学校、国立・専門学校、国立・大学予科（当時は全部旧制）等に軍は指令を出し、入学辞退者の入校を許可しないように厳命したと聞いている。それは配属将校を派遣していた時代だから不可能なことではなく、あり得ることであった。現在の防衛大学校では、入校を辞退する学生は毎年出ているようで、多い年には30名ぐらいの辞退者が出たらしい。（諸君。10月号の143頁）

父兄との面接

仮入校の時だったか入校式後だったか確固とした記憶はないが、新入生40名の父兄の方々と約10分間ほどの面接をした。中には陸士第16期の大先輩の父親殿がおられ、恐縮して質問した記憶がある。面接は集められた資料に基づくものだけあって、父兄の職業まで暗記していた。だからお顔も明確に脳裡に刻み込まれた。初年兵の入隊と違って親密の度合いが全く違い、指揮官対部下の関係ではなく先輩対後輩の関係は、その間に微笑ましいものがあつたと区隊長職は冥利に尽きると実感した。

戦闘は有形無形の戦闘要素を利用することである

経験の重要性

戦闘を通じて私が痛感したことは、体験・経験の重大性である。過去も現在も実務の世界には、数学や物理の法則のように固定的で普遍妥当性を持った規則は少ないようである。そこにある多くは柔軟な、効用に一定の限度のある、流動的な原則があって、その多くは「経験」から発している。

昔からの歴史を調べてみると、大義名分の立たない用兵は、終わりを全うしたことが少ないようである。事実、日清・日露戦争には大義名分があった。しかし満州事変以来の用兵の名分は日清・日露戦争ほどではなく、崩れてきたように思えてならない。

そして「兵術」は口で言い、筆で書いたものではなく、柔道、剣道のように「活術」である。各人が研究し自学して会得するより他はないのである。即ち「経験」が重要なのである。

孫子に「兵は詭道なり」と始計編に書いてあるが、戦略・戦術とは戦闘の方法のことで、その根底をなすものは「詐」(いっわり)から成っている。敵を如何にして騙すかであり、優勢な場合は優勢なりに、劣勢な場合は尚更に大兵力に見せかけなければならない。そして敵の弱点につけ込み、敵の意表を衝くことが戦術の要諦である。そのためには自分の身を如何にして隠し、如何にして安全を保つかが問題となってくる。そこに戦闘の経験が重要視されてくるのだ。

地形の利用教育

戦闘は有形無形の戦闘要素を総合して敵に優る威力を要点に集中発揮しなければならない。と作戦要務令の綱領の第一項に書いてある。作戦要務令は当時の金科玉条の法則で、私は老齢になった現在でも覚えている。即ち戦闘要素の第一は「地形の利用」であった。

要務令の通則にも「攻撃は状況特に地形を判断し・・・」とあり、「遭遇戦でも地形を精密に観察し・・・」とある。特に防禦では「防禦の主眼は地形の利用等、物質的利益により兵力の劣勢を補い・・・」とあり、戦闘指揮官には地形は言葉でなく身に付けるものであった。だから戦略・戦術の根本は如何にして地形を利用するかであって、戦場では「地形判断」が指揮官の最初の決心問題であった。勿論、教育の基礎も然りであり、地形を無視した教育は存在しないのである。

60期が入校してから基本教育の教練も終わり、応用動作に進んだ或る日のことであった。擲弾筒の遮蔽陣地についての教育だったが、学校の練兵場は平坦地ばかりで地形に適当な凹凸が少なく、教育に必要な遮蔽地が見つからなかった。漸く見付けた場所は擲弾筒の訓練に最高の地形だったが、そこには数本の松の木が生えていた。

擲弾筒の弾丸は炸裂弾だから威力は素晴らしく、歩兵隊の中隊長の虎の子兵器でもあった。だから、敵の重火器の射撃目標となり、遮蔽地を選定しなければならなかった。このような状況下では擲弾筒の最高の射撃位置は、射撃の角度(射角という)が45度だから、松の木の葉が45度の射界内に入らない凹地(擲弾筒の発射弾が接触しない範囲)であった。

擲弾筒の射撃についての知識は、戦闘経験者として誰よりも知り尽くしていた区隊長の私は生徒に対し、擲弾筒の弾丸は瞬発信管だから木の葉に接触しても炸裂し、付近の散兵に損害を与える危険があるからと、地形の選定の条件に樹木の存在の有無も併せて教育した。知能指数の高い陸士の生徒だから、被害の点も十分に教育されたと理解している。

教育視察

当日の教育の主眼点は地形を利用した擲弾筒の射撃位置の選定だったから、敵の狙撃の対象となる点を理解させ、遮蔽射撃の位置選定の教育を実施していた。当然ながら松の木はないものと想定しての指導であった。即ち瞬発信管の被害と遮蔽位置の両問題の教育訓練であった。

その訓練を実施中、生徒隊附の楠畑義則中佐が我が区隊の擲弾筒教育の視察に見えた。区隊長の私は型通りに敬礼し、擲弾筒の遮蔽射撃の教育中だと報告した。すると中佐は松の木の生えた場所での擲弾筒の訓練は適当ではないと注意した。そこで私は松の木はないものと想定して教育していると答え、併せて瞬発信管の危険性をも教育していると答えた。実際、私は対空遮蔽の問題も含めており、敵機の機銃射撃も念頭にあったのであった。しかし附中佐は松の木による被害ばかりを強調し、自己自身を守る遮蔽の点を度外視して頑として許さず、速やかに移動して訓練せよと厳命して立ち去った。

中隊に帰って中隊長の天野中佐に其の旨を報告すると笑って答えない。附中佐と中隊長は37期で、私の親戚で陸軍省兵務課長の佐孝大佐（終戦時ビルマ第15師団参謀長・37期）も同期生で、頑固な人物だと噂は聞いて知っていた。

私の予科時代の演習地は、在京の近衛師団・第一師団の諸兵科を含めて代々木練兵場しかなく、現在は其の跡形もない。振武台の練兵場も左程変わらず平坦地ばかりで、観兵式用の域を余り出していないのが現状であった。それも場所の割り当てがあるから尚更である。

そこで指導を主任務とする生徒隊の幹部は実戦の経験は全くなく、我々が被教育者だった時代から一歩も前進していない。実戦の体験者ならば身を隠す重要な課題の「地形の利用」をないがしろにする筈がない。生徒隊幹部の前後の期の先輩達は軍縮時代の出身者であり、其の点が私のような実際の戦闘経験者との大なる差異であろう。

現在教育している陸士生徒は将来、擲弾筒手として射撃する立場になる身分ではない。それらの兵士を教育し戦場で指揮をする立場の人達だから、徹底して地形の利用の重要性を教育しなければならないのであった。

陸士教育の当事者の経歴を一瞥すると、校長、幹事、生徒隊長は陸大出身の別格者であり、生徒隊附中佐から中隊長・区隊長は殆どどの人は戦闘の体験者ではなかった。内地及び満州の駐屯地勤務の出身者が断然他を圧倒していた。外地勤務の者も若干は赴任してきたが、支那の沿岸部の大都市や仏印などからで戦闘体験はなかった。

過酷な激戦が上聞に達したような死闘を身を以って体験した者は数名だったと記憶している。しかも陸大初審合格者は私一人であったから注目の的であったことも事実であった。

陸大出身者や陸士恩賜組は戦闘が上手で、序列の下位の者は戦闘が下手と云うことは絶対にありえない。又、序列の上位組は教育が巧く、下位組は不得手だと云うことも絶対にないと断言したい。教育は一に心の問題であり、熱意、熱心さによるものである。

随機応変の教育

私が最初に初年兵の教育に従事したのは昭和15年12月からである。初めて教育と云う立場に立たされた其の場所は、国民党蒋介石軍の精鋭である第一戦区に直面し、支那戦線最前線の河南省々都・開封南方約60kmの「通許県城」であった。其の地一帯は彼我両軍とも対峙して争奪戦を展開していた。そこに歩兵聯隊の第三大隊本部が位置し、隷下の歩兵四ケ中隊と機関銃・大隊砲中隊の初年兵集合教育の場所となった。文字通りの戦場教育である。

接敵地区での初年兵教育は聯隊としては初めて実施することであり、戦闘しながら初年兵を教育することも初めてのことで、注目の的となっていた。

各中隊は歴戦の勇者であった三年兵が満期除隊して新三年兵と新二年兵だけの戦力に過ぎないから、1ケ中隊の兵力は約150名内外であった。一日も速く初年兵を実戦に使用できるようにしなければ、敵が攻撃してきた危急の時には処置無しの状態に陥るのであった。

私が所属した石岡第9中隊長(51期)は歩兵学校に入校して留守であり、私が中隊長代理を兼ねて初年兵教官となった。聯隊の「初年兵教育計画」では、直ぐ必要で重要な射撃姿勢の教育は入隊から十日間以上も後からであり、この間の戦力を無視した教育計画には私は反対であり、失望と憂愁は余りにも深かった。

現地の通許県域に到着した初年兵教育の最重要教育は「射撃」だと考えた私は、新兵が到着した三日間は軍の規律維持のために整列、敬礼、集合、解散、右向け右、行進、駆け足前進・停止、担え銃、捧げ銃等の基本動作を教育した。其の後は専ら実際の戦闘に必要な射撃姿勢から匍匐前進を教育した。その間に一回、古年兵による実弾射撃の敵襲演習を実施し、迷夢から脱した戦場の空気を実感させたのである。

初年兵が現地の通許県域に到着した五日後に、歩兵団長(旧旅団長)「鯉登(こいど) 少将閣下」の初度巡視があった。そして我が第三大隊初年兵教育の教育状況の視察となった。其の時、他隊は上記した基礎訓練を実施していたが、我が隊のみが射撃姿勢の訓練していたから明瞭に違い、鯉登歩兵団長の眼にとまった。

鯉登閣下は早速、聯隊長、大隊長以下本部関係将校、各中隊長、初年兵教官等を集め、第9中隊の寺前初年兵教官を見習うべしと訓示した。接敵地区の第一線での教育は「何を重点にすべきか」を考えるべきで、三年兵が除隊して兵力不足の時、初年兵を速やかに射撃が出来るように教育することが最重要課題であると。

全将校の前で褒められた私は特別なことを教育した訳ではなく、常に第一戦の戦場にあることを意識し、教育の重点指向に注意したことであり、褒められるとは全く思っていなかった。

鯉登少将は昭和12年の支那事変の当初、河北省から山西省に入る難関の激戦地「娘子関(ろうしかん)」の戦闘で名声を博した聯隊長(当時)である。其の後、進級して我々の歩兵団長に栄転され、終戦時は北海道第七師団長であった。

この鯉登少将の記事を記述した理由は、歴戦の勇将と学校附で戦闘経験のない人との重点指向の差を指摘したかったからである。要は「軍の主とするところは戦闘であり」「百事皆戦闘を基準とすべき」である。第一次世界大戦で各国は総力戦の構想を学んだ。しかし日本陸軍は参加しなかったばかりか軍縮時代に入り、精神主義一点張りに突っ走ったのであった。

学校の生徒隊附中佐や中隊長職の人達は陸大受験に失敗して教育畑に職を求め、陸士予科・本科、幼年学校、予備士官学校や各種実施学校附を盤回(たらいまわ)しにした先輩が断然多いと聞いていた。そして精神訓話はベテランであっても、実戦的な教育訓練は零に等しかつたと私の眼にも映っていた。勿論、陸大卒は総ての点で優秀だとはいえない。

日露戦争から戦闘らしき戦闘もなく、支那事変から大東亜戦争に突入した。第一次世界大戦では各国軍は総力戦構想を学んだが、日本軍は不参加ばかりでなく直ぐに軍縮時代に入り、その間に何等の進歩前進がなかった。第一次世界大戦に参加しなかった(青島攻撃のみ参加)日本陸軍の後進性は取り返しの付かないことになった。其の弊害を痛切に体験した私は、その大戦に参加・不参加の善悪を別として、不参加による弊害、特に兵器の改良を怠り、声を大にして精

神力ばかりを強調しても、それにも限度があり、戦場心理が作用して効果は思うほどあがらなかったと思っている。精神力が次第に高揚し、装備や補給の劣勢を精神力で補へと力説しても、人間はやはり動物に過ぎず、優秀な総合戦力に勝る敵軍には到底勝てず、腹がすいては戦には勝てないのであった。その補給とは即ち地形の利用の優劣の問題であった。

諸葛孔明はなぜ、泣いて馬謖を斬ったか^{ばしょく}

これは三国志で有名な戦例である。幸い私は平成3年(1991)に五丈原から現地一帯に足跡を遺したから、一段と強い印象が脳裡に刻まれている。(所謂、地形の利用問題)

兵法家で有名な馬謖は自分の才能を恃んで実戦を軽視していた。つとにこれを見抜いていた劉備(蜀漢の初代皇帝)は、諸葛孔明が彼を重視して大事を招くことを恐れ、臨終に際して彼を重用しないように注意したほどであった。

三顧の礼を以て迎えられた諸葛孔明は劉備の注意に耳を貸さず、兵法家を自認している馬謖の才能を認め、「街亭」(かいてい)の戦闘で彼を使用した。(場所は五丈原の北方2k)

敵に通じる街道を遮断して布陣せよとの孔明の命令に背き、自らの判断で街道を望む高山の山頂に布陣した。敵が接近すれば高みから一気に攻め下って粉碎しようという作戦だったが、敵は布陣している山を包囲して水路と補給路を遮断した。

そのため馬謖軍は飢えと渇きに迫られ、続々と敵に投降し、総攻撃の前に惨敗を喫してしまった。孔明の命令に反して山頂に布陣した馬謖は、孔明により斬罪された。これが有名な「泣いて馬謖を斬る」の戦闘の概要で、いくら兵法家の知識家であっても実践の経験がないから、実際の戦闘で負けてしまった良い戦例である。

私も乾季のビルマの山岳戦で水源に苦勞した体験をしたが、これは当人しか其の真剣さを考えない問題である。学校附将校と第一線将校との交代を盛んにし、教育に供すべきである。

渋谷区隊長の戦死を偲ぶ (⑪～十) (60期戦没者追悼記51頁参照)

渋谷区隊長は私と共にビルマに赴任した予科区隊長の同期生である。他に三名の本科区隊長経験者も同行したが、私を除く以外の人達は残念ながら帰らぬ人となりビルマの土となった。追悼記によると戦死の状況は全く不明で、戦死の報を知ったのも戦後のことであったと。

私もビルマの首都ラングーン(現ヤンゴン)で彼と別れて以来、広大な戦場で再会する機会もなく、戦後の集結地となったタイの某地で、奇しくも大隊長の彼の部下中隊長に会い、渋谷茂氏の戦死の状況を知ったのである。

ビルマと中国・雲南省との国境線の戦闘で、彼は大隊長として指揮下の各中隊の命令受領者を集合させ、作戦命令にある記述すべき事項を型通り丁寧に下達していた。その集合場所に敵の砲撃か、或いは敵機の急降下爆撃を受け、全員が木っ端微塵に吹っ飛んで戦死したと云う。戦場では我が無線機の発電機の電波で位置を確認し、砲爆撃を集中してきたのであった。

渋谷氏は歩17聯隊の出身で関東軍に所属し、戦闘は残念ながら未経験者であった。私は支那やビルマ戦場での戦闘間、命令受領者を集合させて命令を下達したことは一度もなかった。攻撃でも防禦でも部下の各隊を急いで巡視し、其の場で命令を下達した。教範にも「状況により」と云う一項があり、絶対に型にはまってはならない。それが戦場と非戦場の差異である。

戦闘では犠牲者が続出したから新米の中隊長は経験は浅く、大隊長は誰よりも早く広い全正面を駆けずり廻り、陣頭指揮をしなければならなかった。それは実戦の経験から編み出した行動である。戦術とは何かと問われれば、敵よりも早く全般の地形を知ることであると答えたい。

豊島園と村山貯水池サイクリング

寺前区隊諸君の予科時代生活の中で想い出の一つとして残るものは、豊島園への行軍と野球の試合、並びに所沢から村山貯水池へのサイクリングであったと思っている。これは他区隊では経験できなかったことだろう。

その思い付きは、私の本科時代の昭和14年夏、富士の裾野の演習場である「御殿場廠舎」（廠舎とは屋根だけで壁のない板張の仮の建物の意）に二週間に亘る歩兵科の野外演習であった。それは大隊砲と聯隊砲の実弾射撃演習である。

その他の演習地では豊橋・高志ヶ原廠舎、富士の裾野・駒門廠舎、千葉・習志野廠舎、大元帥陛下統裁の沼津から富士の裾野に掛けての民家二泊の大演習、それら5回の演習であった。其の外に野外戦術教育で静岡・三島付近、測図演習で静岡・掛川付近、遊泳演習で房総半島外房の御宿などがあり、高志ヶ原・安倍川餅、習志野・南京豆などの味は懐かしい想い出である。

何れの想い出も忘れられない。しかし上記した御殿場の実弾射撃演習は、歩兵科の大隊長である生徒隊附中佐が二週間に亘る演習日を一日繰り上げ、余裕日を捻出した其の一日を、天空に聳えた「富士登山」に振り向けたのであった。この時、富士山に登山していなければ一生、登る機会はなかったと思っている。（現在の登山と異なり麓からの登山で難行軍であった）

いくら陸軍士官学校と雖も「柱（こじ）に膠（にかわ）して瑟（しつ）を鼓（こ）す」（史記）であつてはならない。即ち「琴柱を膠で固定してしまつては調子が変わられないことから、物事の變化に応じられず、融通のきかない例え」である。我々は来年は卒業して第一線に出て死闘を演じる身である。附中佐の歩兵科大隊長は独断で計画を変更し、我々に日本一の山「富士」登山を経験させたことは偉大な決心だと、感激しない士官候補生は誰一人いなかったと思っている。

この附中佐の歩兵科大隊長は歴戦の勇者でも有名であった。この猛者の人からの教訓は何かと問われれば、「政をなすの要はただ人を得るに在り」と答えたい。政は軍事にも通じるもので「貞観政要」（唐）にも書いてある。又、「苦中の苦を受けざれば、人の上の人たること難し」（極限状態の苦勞を体験した人物でなければ、人の上に立つ資格がない）と論語の通俗編に書いてある通りで、立派な上司を得た我々は幸いであつた。

豊島園への行軍

これは体力増進の為の行軍だつたと思っている。各区隊長は図上で半断して行軍計画を立案し、目的地を選定したと思っている。だから各区隊の行軍の方向は全く異なっており、中隊長にもそのように計画案を提出した記憶がある。

私は距離を考慮して昼食場所を選考し、其の地が偶然にも豊島園になつたのであろう。富士登山のように「想い出」になるかどうかは不明であつた。当時としては遊園地の数は至って少なく、小さな田舎の公園でも想い出になればと選定したような気もする。

（私等の予科時代の校舎は市ヶ谷台の上に聳え立ち、高層建築物がなかったから靖国神社の大鳥居や、赤坂離宮の黒鉄扉も眼下に見えていた。宮中参観も二回、新宿離宮その他の離宮の参観も許されたばかりか、日曜ごとに東京市内の名所見物に出歩いたものだ。平和の恩恵に浴した良き時代であつた）

豊島園に到着すると管理人は入場料を無料にして特別待遇をして歓待してくれた。休憩に帰って昼食を摂っている時、公園内の野球場で草野球をしていた。早速、練習試合を申し込むと快諾を得て試合となつた。「蓋世の氣」（天下をのむと云う気概に富むこと）の旺盛な陸士生徒も、一般国民と和むことも必要だと感じた私は、自己の責任において練習試合に臨んだ。

若しその行動を非難する人が居れば、直接私に抗議すればよいのだが、そのような言動は耳にしなかった。ただ蔭で言っているとすれば卑怯千万で、ずる賢い点取り虫的人物と言わなければならない。

兵法も責任観念の問題である。元来、兵法というものは「死物」と同じである。それを活用するのは将たる者の心一つに懸っている。それを「運用の妙は一心に存す」と言うのであった。

村山貯水池と所沢へのサイクリング

大東亜戦争開始直後の我が陸軍の進撃作戦は、マレー半島の縦断電撃作戦で開始された。我が機甲部隊の急迫により英軍参加の豪州軍以下は総退却を余儀なくされたが、我が軍の歩兵部隊の追及も容易ではなかった。そこに眼を付けたのが「銀輪部隊」と云った自転車部隊で、開戦当時は華々しいデビューであった。(後日、私がビルマに赴任した部隊も其の銀輪部隊である)

学校教育の教育計画にはサイクリングは無く、私の独断だったから日曜日の休日を選んで課外教育とした。凡そ兵戦は独断を要することが頗る多く、その精神は服従と相反するものでないと、作戦要務令の綱領第五番に記述されているから、教育計画に抵触することはなかった。

南方戦線当初は航空機の飛躍的な跳梁跋扈により、昼間の陸上部隊の行動は思うように進まず、夜行軍に頼るしかなかった。しかし昼間の戦闘で将兵は疲労困憊し、夜間戦闘の強行を継続する体力はない。そこで考案されたのが自転車行軍であった。その当時までの追撃専門は騎兵集団だったが、これも航空機の発達で必然的に消滅し、銀輪部隊が誕生したのであろう。

それを区隊生徒に体験させたかったから、区隊附下士官の松嶋軍曹に自転車の数が揃うかどうかの調査を命じたところ、予感的中して準備はOKとなった。

目的地を村山貯水池に選定した理由は、ここは東京府(当時)の水壺であり、米飯の日本人に最高の必需品である飲料水の源で、地図上でも最も適した昼食場所だったからである。だからこそ当時の水源地周囲の山岳地帯には、高射砲陣地が設備されていた。

村山貯水池に行く途中の所沢市には、私の支那戦線・中隊長時代の分隊長「金子光一」(元軍曹。負傷して帰還)氏が住み、彼が経営する立川航空の子会社に立ち寄って部品工場を見学することも、時局を認識させるのにも貢献すると考慮した。

この自転車行軍での収穫と反省は、中途半端な曖昧な装備では目的達成が困難であると云うことであった。出発早々、「パンク」という事故が発生した。このことは思いも掛け無いことであった。事故対策が念頭に無かった指揮官の私の責任は重大である。

これが実際の戦場であれば絶好のゲリラの好餌食になることは必然であり、犠牲者が出ることは間違いなかった。勝ち戦ばかりを体験してきた私には、事故を收容する処理部隊の設置は毛頭なかったのである。これは立派な教訓となった。

豊島園と村山貯水池への行軍は区隊の諸兄にとって「思い出」になったのだろうか。今思い出すと聖書の教えが浮かんでくる。『愛するに時があり、憎むに時があり、戦うに時があり、和らぐに時がある』と。

私は極限を身を以て体験した者として、戦闘(戦争)と平和を味わった、そこに指揮官対部下の関係の「刎頸の友」(ふんけいのとも)がいた。そして60期の諸兄との出会いには、其れに劣らない先輩・後輩・同窓の「瓜葛の親」(かかつのしん)があった。即ち「うりや、くずのつるが巻き付くうに、親類のような縁がつながっていた」と、老醜無惨で夏炉冬扇のように無益となった現在でも、そのように感じている。

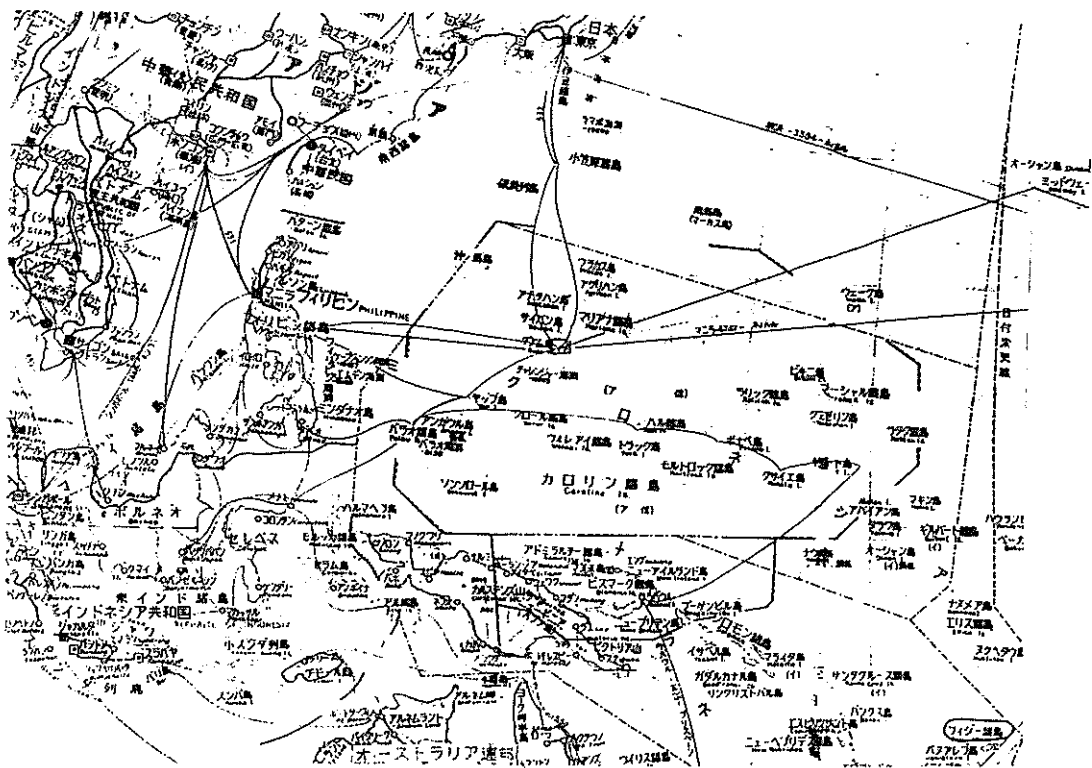
大東亜戦争後半期の概要 (陸士第60期生入校前後の戦況・下図参照)

〔あの戦争をどう考えるか、我等当事者にとっては避けて通れない課題である。我々戦前派・戦中派にも「大東亜戦争肯定論も否定論」もあると思うが、この「思い出」にはそれは触れないことにした。血みどろの戦闘を体験し、四面楚歌の中の昭和21年6月、浦賀に上陸してから1ヶ月間、原爆投下の広島に残留して残務整理をした。その思い出は「幻滅」の二字である〕

当時の大本営が絶対国防圏構想を策定したとき、連合軍の主な反攻作戦を中部・南太平洋方面から比島、台湾方向へと判断し、またインドからビルマ、タイ方向、アリューシャンから千島列島方向、豪州から蘭領東インドシナ諸島方向、インド洋からアンダマン諸島、スマトラへの攻勢も考えられ、防者の立場になると、至る所が危険で対策に苦慮した。特に防備薄弱な中部太平洋の島には、満州、支那、内地から多くの陸軍部隊を投入し、19年中期を目途とし、戦略態勢を確立しようとした。しかし、陸軍は海洋作戦の準備も訓練も不十分であり、船舶の不足と消耗により輸送は著しく遅延した。

一方、連合軍の進撃は急であった。米機動部隊は、早くも18年11月ギルバード諸島に、19年2月にマーシャル諸島に襲撃し、ついでトラック島、マリアナ諸島に大空襲を加え大損害を与えた。(下図参照)

既に絶対国防圏の攻防が始まったのである。大本営は急ぎ中部太平洋の陸軍部隊を統率する第31軍を設け、取り敢えずの作戦準備に努めた。また、4月、比島・豪北・南西方面の全軍を南方軍総司令官の隷下に入れ、同司令官が南方全域(ラバウル南東方面を除く)を統括して一元的運用ができるよう、統帥組織を改めるとともに比島の航空作戦準備の促進を図った。



南東方面では、2月、アドミラルティ諸島が失陥してラバウルは完全孤立化し、ニューギニア北部でも、4月、遙か後方のアイタベ、ホーランジア航空基地が占領され、第4航空軍は大きな痛手を受けた。第2方面軍の隷下に入った第18軍は、善戦しつつ困難な後退を続けた。

6月15日、連合軍はサイパン島に上陸、日本海軍の連合艦隊が迎撃に惨敗し、同島守備隊は玉砕した。続いて連合軍は、グアム・テニアン島に上陸し、ここに、わが絶対国防圏の重要な枢軸は破綻し、米空軍は、これらの島を基地とし、日本本土を爆撃できる地歩を確保した。

このマリアナ失陥は、日本の運命を決する一つの転機となったものである。そこで大本営は、絶対国防圏の内域における作戦準備の促進を図ったのであった。

比島、台湾、南西諸島、本土、千島にわたる海洋第一線の防備を急速に強化し、右のどこかに敵が来攻した場合は、随時、陸海空の戦力を結集して、反撃決戦を実施する企画である。これを「捷号作戦計画」という。このため、関東軍、支那派遣軍から兵力を抽出転用し、戦備の増強を図ったが、日本の戦力造成が底をつき、輸送の船舶や海軍の護衛力が不足し、人と物が現地で戦力となるには相当の長期間を要した。

大陸方面でも活発な作戦が行われた。19年3月、ビルマ防衛強化のため、進んで連合軍の反攻拠点を覆滅しようとし、第15軍（牟田口中将）が主力となり、インパール作戦を開始した。しかし補給が続かず作戦は頓挫し、7月中旬、逐次後退し英印軍が攻勢に転じてきた。

またビルマ北部のフーコン地区、支那・雲南省からの米・支連合軍の反撃も急で、連合軍の支那に対する補給遮断を持続することも次第に困難になってきた。

支那戦線では、支那派遣軍が敵飛行場群の覆滅を主目的として、19年4月中旬から作戦を開始し（一号作戦という）、河南・湖南省の支那軍を撃破して広西省に進攻し、年末までに仏印に通ずる陸路連絡の大陸打通を完成、ついで翌20年1月、南部粵漢打通作戦に成功した。しかし広大な戦域内の飛行場群を覆滅し航空優勢を確保することは困難であり、さらに作戦中の6月から、在支那の米空軍の戦略爆撃機が北九州、南満州に来襲した。

19年10月中旬、米機動部隊は沖縄、台湾を空襲し、米軍は10月20日、レイテ島に上陸した。大本営は18日、比島捷一号作戦を発動し、これを迎撃して激戦を展開した。

大本営の計画では、地上決戦はルソン島と予定していたが、これを変更し、レイテ島において陸・海・空の総力を挙げて決戦を試みた。しかし海上機動が極めて困難で、適時に総力を発揮できず、必死の航空特攻も戦勢を挽回することができなかった。20年初頭から戦局はルソン島の持久戦に移った。

このため南方地域と本土との海上輸送は、東支那海で分断され、船舶部隊の懸命な努力にかかわらず、南方重要資源の内地への搬送は途絶した。

ビルマ方面では、連合軍がインパール作戦後、四周から攻勢に出てきた。わが第一線守備隊は善戦し、各所で玉砕が続いた。印度～ビルマ～支那間の補給ルート遮断を放棄し、方面軍は戦線を整理して逐次、南部ビルマ要域の防衛態勢に移った。

関東軍と朝鮮軍は、慎重に対ソ警戒、域内の治安確保に任じていたが、多数の部隊が抽出され、戦力は著しく減退し弱体化していた。19年9月、大本営は対ソ全面持久構想に移転し、関東軍は新たに対ソ作戦準備のため、まず困難な軍備充実に着手した。

19年11月以降、米機動部とマリアナ空軍基地からの本土空襲が激化した。

捷一号決戦に破れ、本土と南方資源要域を分断された日本は、日本、満州、支那を基盤として、本土方面要域の防衛に転移せねばならぬ事態に陥った。戦争・作戦指導上の一大転機である。

昭和20年1月、大本営は本土の外郭地帯の縦深にわたる持久作戦により、進攻米軍に損害を与えつつ、この間に本土防衛準備を遂行する作戦計画大綱を策定した。

これを実行するには、多数の部隊の動員、大陸方面からの兵力・軍需品の転送、本土戦場化に伴う民生・軍需生産など複雑困難な問題の解決が緊要事である。このため取りあえず増加兵力百五十万の20年6月概成を目途とし、応急兵備に着手した。

2月、米軍が本土に近い航空基地硫黄島に上陸、守備隊は善戦敢闘して約四十日の持久戦のち玉砕した。

4月、沖縄本島に上陸した米軍に対し、陸海軍航空特攻隊、水上挺身隊等が総攻撃をかけ、地上部隊は力戦奮闘して三カ月近く頑強な戦闘を続けて、本土防衛作戦準備に寄与した。

この間、本土では統帥組織を強化し、根こそぎ動員による新編成部隊を増設し、先ず南九州、ついで関東地方を重点とする防衛態勢確立に懸命の努力を払った。

外地では南方軍が自活自戦、連合軍の進攻を阻止し、全軍への作戦寄与に努めていた。比島の第14方面軍は、食糧の不足と疾病に悩まされつつ苦戦を続け、ビルマ方面軍は逐次南東地区に後退を余儀なくされ、マレーの第7方面軍は戦路態勢を収縮して要域確保の準備に移行し、またタイ・仏印の防備強化を図っていた。

支那派遣軍は支那軍と戦いつつ主力は対米上陸作戦準備、一部をもって対ソ作戦を準備した。

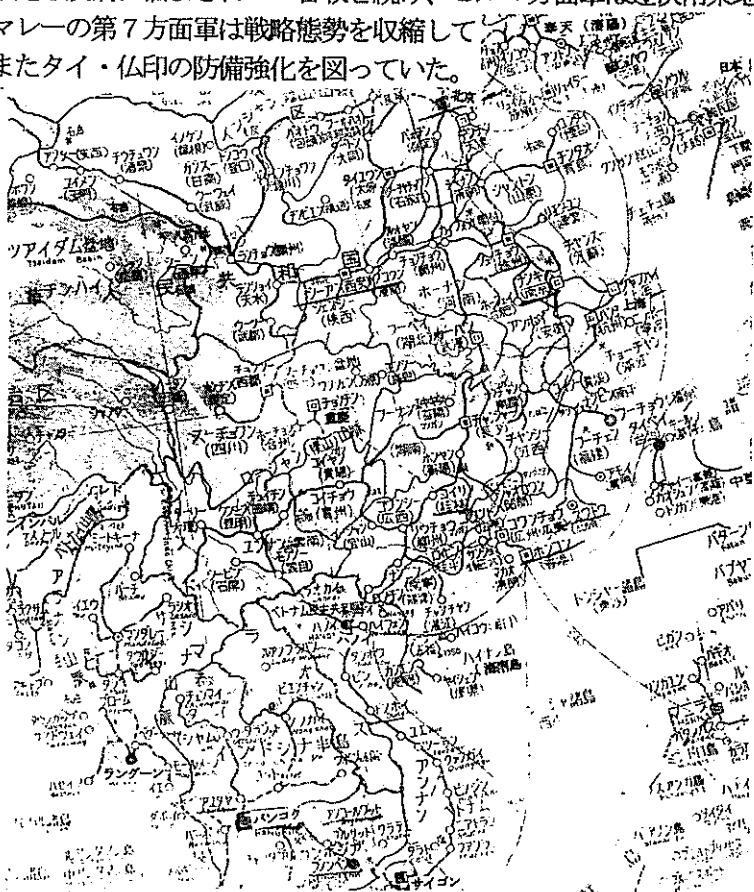
関東軍は、満州南部の山岳地帯を根拠とする対ソ作戦を準備、8月9日、突如としてソ連軍が国境を突破して侵入してきた。減退した戦力の関東軍は頑強な持久行動もとれず、ソ連は満州、朝鮮内へ深く進攻した。

本土では米軍が原爆を広島、長崎に投下し、多くの住民が殺害された。8月14日、日本はポッドム宣言を受諾し、各戦域指揮官に終戦を伝達した。15日、終戦詔書の玉音放送があり、米軍の本土空襲はやんだ。

各戦域の日本軍は、おおむね整然と終戦処理に着手したが、ソ連軍の進撃はやまず、満州、支那北部、北部朝鮮、千島、樺太において、8月23日頃まで戦闘が続いた。

9月2日、米戦艦ミズーリ艦上で、日本は降伏文書に調印し、八十年の歴史を築きあげてきた日本陸軍は、11月末までに解体した。しかし海外には、なお三百万近い陸軍将兵が帰国を待っていたのである。

(上図は支那大陸～東南アジア地区の地図)



陸軍士官学校 (予科)

第四中隊第九区隊物故者氏名・命日表

氏 名	死亡年月日	電話	留守宅
豊嶋 毅	昭、20、02、13		
菅野辰男	昭、30、 ?		
高田耕一	昭、36、02、08		
石田雄康	昭、47、04、19		奈良市
馬田昭治	昭、53、04、08		兵庫県
上田 寛	昭、59、05、05	044~966~6120	川崎市
永山三郎	平、16、03、24		
鈴木郁雄	平、17、02、10	044~954~5263	川崎市
樋浦 正	平、18、01、19	026~296~5561	長野市

追悼鎮魂を冀い、留守宅・電話番号等の調査を依頼いたします。

おわりに

陸士第60期生会から「戦没者追悼記」が贈呈されたのは、平成18年9月7日であった。「まえがき」に書いた通り、その前々日の9月5日に今年の代表幹事の林 光春君宛に、病軀と体力の衰弱のため、私は今年の寺前会には止むを得ず欠席するとの返信を提出した。

60期「戦没者追悼記」の受領と「区隊員物故者の追善供養」の代わりになればと思いながら、寺前会諸兄に何かを書き残しておきたいと考えた。しかし、鈍感漢（ドンカツカン＝にぶくて鈍感な男）の私が、あれこれと揣摩憶測しながら「区隊長の想い出」を書き始めたものの、耐用年数の過ぎて金属疲労の甚だしい上に、毫碌・朦朧の状態が進んで老醜無惨な身では、蛙鳴蟬噪の短い文章しか書けなかった。先ずこのことを御容赦願いたいと思います。

敗戦からは流れましたが、秋山照雄君の絶大な御尽力により昭和43年8月3日、四谷見附の偕行社に於いて、23年ぶりに第一回区隊会が開催され、再会を祝福し合って名称を寺前会と呼称するようになった。

昭和44年5月、第2回寺前会は陸上自衛隊伊丹駐屯地に於いて天野中隊長も参加されて開催されました。第3回は昭和50年11月2日、熱海温泉に於いて開催され、其の後は毎年連続して東京・名古屋・大阪等に於いて開催されました。回数を増す毎に次第に参加者も増加し、過去が音を立てて回転するように寺前会は既に三十数回に及んでおります。

私にとって最も印象に残るものは、平成元年3月9日に山代温泉ホテル百万石、平成14年11月11日に山代温泉かんぼの宿に於いて、遠路を遠しとせず多数の会員が御参集してくだされ、盛大な寺前会が開催されたことであります。

今回は奥三河の渡津弘道猊下の慶泉寺内に於いて、在学中に黄泉の客となられた手嶋 毅君を始めとして、戦後に鬼籍に入られた八名の物故者の供養に寺前自身が勤められないことは、誠に痛哭流涕の極みであります。

時は流れて人は移りましたが、歴史の流れは永遠に停止はありません。私には極限を体験した時の「想い出」や、戦争と平和を味わった「想い出」など多くの「想い出」があります。

しかし、日往き月来たり、今日まで生き長らえて来た「想い出」の中で、60期諸兄と同火共食の陸士予科時代を共にした生活の「想い出」が、「全生涯の中で最高の想い出」であります。

寺前会の諸賢諸君、若木のように柔らかかった陸士時代の感受性と共に、成長してゆく時期に刻み込まれた体験は、一生かけても消し去ることは出来ません。むしろ、その刻み込まれた体験を生涯の課題として、背負って来たように感じるのではないのでしょうか。

想い出は実に美しいものです。そこには嫌なものは消えてなくなり、すべてが楽しく思い起こされて来る。そして時は移っても想い出は消えるものではありません。

人は誰でも定まった出生があり、定まった時代との出会いがあります。その不思議な出会いが我々陸士関係であり、寺前会関係者であります。しかし有限な肉体と精神を持つ我々人間は、限られた世界の中に生まれ、また去って行く運命の中に存在しております。

あの死屍累々とした激戦場で斃れた戦友の死も、病気で亡くなった人の御逝去も、其の寿命は天からの授かりものです。我々は長寿をまっとうできるかどうかは、誰にもわからない。だから物事は後に残してはいけないのです。笑いたい時には笑い、泣きたい時には泣く。そのように今を生きる事が大切で、後になっては取り返せないものも多いのです。そのことは今回、寺前会への不参加で私が痛切に感じたことです。

生きることは年齢ではなく、意欲だと言われていますが、私も同じように感じております。人間は気持ちさえ老け込まなければ、人生には退場と云うものではありませんから、精神的な若さは失われたいと思っております。

盛りを過ぎたころの野菜や果物などは、初物のように返って珍重されます。人間も同様です。今まで生き長らえてきた其のことが、計り知れない重みになります。若者がいくら頑張っても、その重みを得ることは出来ないのです。

泣いても笑っても一生は一生です。ゆったりと構えても、あくせくしても、日は過ぎて行く。今日、生きることに集中すれば、そのほかは些細なことではない。明日はまた今日の続きになろう、と島崎藤村は書いております。

一遍上人は次のように言われている。「生老病死を四苦というが、これは誰も避けられない。身分の差も貧富の差も関係なく、人はこれを受けなければならないものである」と。

寺前会の諸兄も既に高齢化しました。考えなくとも、この世の人生の究極は死であります。死ぬ時が来れば死ぬだけだと考えれば大したことではないものです。年齢は数字であり、中身とは何の関係もないのです。

寺前会の皆様、これからも今日、一日一日を思う存分に生きましょう。そして来年も再来年も邂逅して久闊を新たにしたいものです。

平成18年10月10日

寺 前 信 次